

学園ニュース

富山大学

NO.59

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和63年3月15日



学内風景（その24）教育学部から見た夜の図書館 長澤 美江子

目次

卒業生へのはなむけの言葉	各学部長及び経営短期大学部主事	2
定年退職者のあいさつ		9
新任教官紹介及びあいさつ		18
オーストラリア開拓の忘れ形見達	教育学部助教授 高橋 春成	20
一女子留学生の日記から	外国人留学生（人文学部） 李 寧	21
昭和62年度公開講座を終えて	公開講座委員会委員長 吉田 順作	23
学生部だより		24

△▼△ 人文学部の卒業生へ △▼△

人文学部長 三 寶 政 美

人文学部の卒業生諸君、四年余にわたる螢雪の功成って、ここにめでたく卒業の日を迎えたことにここから祝福申しあげる。本当におめでとう。

学校は入り船出船する港のようなものだと誰が言ったのか、妙に納得させるフレーズである。してみると諸君はいよいよ富山大学という港をあとに実社会という大海原に向かって、今航海せんとしているのだ。別れに当たり、一教官として祝福しながらも、一方では断ちがたい一抹の寂しさを禁じえないのも、未知の世界をめざして旅発たんとする出船を見送る者に去来する感傷とやらであろうか。

明日より実社会に旅発つ諸君に向かって、できることなら諸君の内奥を揺さぶるような強烈なことばを述べたいものだが、時間の流れのままに怠惰に生きている私ごとにはできない相談である。しかし人生の先輩として一言申しあげねばならぬ立場にあれば、貧しい時代のつまらぬ昔話で責めをふさぐとしたい。

話は横道にそれるようだが、我々年代層の大学生生活はいろいろな意味で閉ざされた世界のままだった。早い話が漱石の小説ではないが、下宿先の娘と相思相愛の仲になり結婚までした友人がまだ存在したそんな時代であったのだ。それに大学自体も象牙の塔とやらを振りかざして我々学生に対してさえ閉鎖的であった。身近な例だが、学務（会計）系の受付の小窓が私にはその象徴として、映ったものだった。本来学務係は大学と学生をつなぐ唯一の場となるべきはずのものである。その窓口が二枚の引きちがいの小窓でしかなかったのである。

「あの……すみませんが……」我々学生はいつも恐るおそる小窓を手で開けながらまず用向きを申しあげねばならなかった。困ったことに、学務係の小窓に手をかける時は授業料支払いの遅延の言い訳か、学割の願い出にきまっていたから、どうしてもこちらの声はくぐもりがちとなる。するときまって「なんですか、用事は」といかにも面倒くさいといった、つけんどんな係員の答えがはね返ってくるのを覚悟しなくてはならない。しかもこちら側は玄関のロビーに立って仰ぎ見ながら口上する分だけ懇願

調になり、見下される分だけ相手は尊大なものに見える。

だが、ここでメガネをかけた当時の若い係員のために一言弁明しておかねばなるまい。というのは、この頃（昭和30年代）の役所の窓口係は総じてこんなものであったからである。市役所しかり。とくに国鉄のキップ売りの窓口のひどさは音に聞こえていたほどで、ぶっきら棒で無愛想の典型だった。お客はキップを買う時いかに行先きとキップの種類をまちがえずに言えるかに腐心した。たまたま間違っ言上しようものなら、あごをしゃくって追い払われかねないからである。終って「ありがとうございました」と礼を言うのは駅員ではなくてお客であったという嘘のような本当の話である。

大学のメガネ係員もこうした時代の風潮に乗って、それが当然の行為と振舞っていただけのことであった。しかし、それは後々になって知ったことであって、当時の私にはメガネ氏は怖い存在でしかなかった。そんなある日、記憶は定かでないが私は何かの用事で不案内な街角を自転車に乗っていた。その途中、運悪く自転車のタイヤがパンクした。この頃は舗装道路が至って少なく、ちょっと小道に入れば、ジャリ道であったから自転車のパンクはめずらしいことではなかったが、若い者が昼日中途方にくれた顔をさらしてパンクした自転車を推して歩く図はけっしてかっこよいものではない。おのずとうつむきがちになって歩いていた私は、いきなり自分の名を呼ばれてびっくりした。声をかけたのは、なんと怖いあのメガネ係員だった。彼は近づいてくると、いかにも同情に堪えぬという風に私にやさしく声をかけたばかりか私の自転車を後ろから推しながら、もよりの自転車屋まで案内してくれたのであった。肩を並べて歩いているうちに、これまで私よりずっと年上の男だとばかり思いこんでいたメガネ氏は意外にも若く、我々とそう変わらない世代であり、またメガネの奥にはやさしい瞳がまたたいているのを私は知った。別れぎわに、彼はその瞳をじっと私に注ぎ、右手を自分の額にやりながら「ぼくも本当は大学に入って勉強したかったんだ」とぼつりと私に語った。

この瞬間、メガネ氏は係員の高みからとびおりて私と一体化したと、私には思えた。

この日の傍^{きょうりゅう}は私を有頂天にさせるにたるものだった。これからは私はくぐもった声で授業料支払いの遅延の言い訳をしなくてすむし、学割も気がねなく入手できるとほくそえんだ。学友の羨ましそうな顔が見えるようだった。数日後、私はもうものおじすることなく、ガラリと学務係の小窓をあけた。ところが、メガネ氏ははっきりと私と承知しながら、例のいかにも面倒くさいといった、つっけんどんな口調で「なんですか、用事は」と言ったのだった。

私のもくろみはあっけなく消えたが、だがそれからというものの私のメガネ氏を見る眼は一変した。彼は相変わらず小窓からメガネを光らせていたが、私はそのメガネの奥にまたたいているやさしい瞳を見つづけていたし、そればかりか彼が一日の勤めから帰宅すれば、崩れかけたあばら家から幼い弟や妹がぞろぞろと出てきて彼を迎え、一步内に入れば、暗い部屋に老いた父か母かが薄いせんべい布団に病臥している光景を想ったりもした。もとよりそれは私の勝手な妄想でしかないものだ。本当は、彼は近在

の大きな農家の跡取り息子かなにかで、怠け者のために大学に入れなかったのかもしれない。だが私はそのように想わず、彼を貧乏息子に夢想することで、彼を理解し、彼との一体感を得たいと願った。私がこの直後に迫った専門移行時にためらうことなく文学研究を選択したのも、あの日のメガネ氏との遭遇が作用していたといえないことはない。そして今日までメガネ氏への妄想を断ち切れな^{はため}いままに傍目にもみすぼらしい研究を細々と続けてきたような気がする。

卒業の晴れの日を迎えた諸君に贈る言葉としては、なんとも冴えない一文となってしまったことをお詫びしたい。ただ私が言いたいのは、人文学徒としての意識をこれからも失わず、人間との連帯を人間の強さで求めるのではなく、自分も含めて人間の弱さに身をよせていくことで求めているほしいということである。最後にキングスレイ・ウォードのこぼをもって結びとする。

夢を見るがいい―試すがいい―失敗するがいい―成功するがいい。

“ 卒業生へのはなむけの言葉 ”

教育学部長 野村 昇

教育学部卒業並びに専攻科修了の皆さん。この度、諸君の研鑽の結果、目出度く卒業または修了されますことを心からお慶び申し上げます。

そして、同時に、諸君を今日まで育て導いて頂きました方々に対しまして、敬意と感謝の念を捧げます。

諸君の中の多くの人は、良い先生に巡り遭ったことにより、望ましい教師像を目指して富山大学に入学されました。そして教養部で一年半の修学をした後、専門課程に進んで各課程・教科を専攻し、真面目に勉学に励んでられました。その間、授業参観、事前指導、教育実習、合宿研修等と大学内のみでなく、広く多くの他の機関の先輩教師方や幼児・児童・生徒方等との出会いをもたれ、更に、他の教場・施設や自然における学習と生活体験を積み重ねて、より一層教員志望への意欲を高められ、教育に関する

基礎の修得と基本の理解に励まれ、実践訓練に精を出されてきました。その成果に対して、ここに教育学士の称号が与えられる訳であります。

今日、世界の人口増加が急速で21世紀初めには今の1.5倍にも及ぶと予測されています。しかし、先進諸国では出生率が低下して就学児童数が漸減しており、教員の需要減を招いております。行政的には40人学級とか初任者研修の指導教員制度などの実施で対応されていますが、今後の見通しは厳しいものであります。このような訳で、諸君には今回の採用予定とならなかった方もあり、同情に耐えません。

しかし、何れの道に進まれようとも厳しいことは多く、一度でくじけてはいけません。更に成長して頑張ってください。

さて、高学歴社会となった今日、卒業はまさに諸君の人生のスタートであります。科学技術の高度の

発達と社会の著しい変容と、それに伴う価値観の多様化に対応して、生きて働くためには、生涯学び続ける必要があります。

この機会に、諸君は来し方を静かに振り返って、受けた数々の恩義に対し、あらためて感謝しておられることと思います。私共は日常、目の前のことに心奪われ、仲々にその周縁や基盤を構成し支持している恩恵に気づかないことがあるのではないのでしょうか。手前の例で述べることをお許し頂きますと、私は或種の窒素化合物の類似物質群の混合物の迅速分離と微量定量法を確立しようと研究を始めました。すると、次々と文献に関連の研究報告が出されてきました。競争のさ中では、感謝という感情にまで成長しない複雑なあせりの気持ちで苦悩していました。然し、他と異なる工夫を強いられた結果として、一応の達成を見るに及んで、途中での恨めしくさえあった他の研究報告に教えられたことの多いのに気づいて感謝できるようになりました。

諸君が愈々社会生活に入られるにあたり、今述べたような只一つの課題解決に限ってのことではなく、人との絆、恩義をより深く考えてみられるなら、それが実に大きく多いことに気づかれると思います。そして、いうまでもなく、それがまた、諸君の成長・発達への熱い願い・祈りになる筈であります。

もとより自律的に、自己に対して責任をもって生き方を探り生き抜いていかれるのでありますが、真実・善・美・聖を追求することにおいて、生涯教育ということで、今後益々勉学に励んで頂きたいと願います。他から受けたこと、受けることにおいて

「足る」を知り、感謝する。他に及ぼし、他に働きかけることにおいて「足らざる」を知る。自らを生かすこと、学ぶこと、努めることにおいて「飢え」、「渇き」を自覚することになるのだと思います。

既に今、諸君は厳しい試練を受けての卒業となりました。でも幸いに饑餓と寒さは凌げる時代です。そして、漸やくINF廃絶に向かってもいます。地球ぐるみ、人類全体で解決を図らねばならない課題が指摘され、その対策のための情報作成と収集が検討され始めています。それは一企業体や一国等の責任の域を超えて、個別の生き方、生活態度の問題として根深く、またひろい範囲に亘るものであることが指摘されてもいます。

高度科学技術の発達と大型化・広域化した経済機構に対しても人道的な観点での歯どめが必要で、手遅れにならない対策が立てられねばなりません。国際化、情報化、個性化が進行して、人間生活の基盤をなす言語、習慣が乱れ、思潮、宗教等を含めた人心が動揺し混乱することのないように、人間学的な領域の一層の進歩発展が期待されているといえます。従来は、何十年、何百年もかけての対応であった変化が、最近では5年、2～3年という短期間で激変しているといえます。

この意味においても、教育学部関係者の責任は極めて大きく、努力のし甲斐もあると考えます

教育学部を卒業されます諸君はどうか大きく希望をもち、意欲的に自己実現に励み、健康に十分留意して、社会に必要な存在となって下さい。そのことが諸君の将来に幸となります。

*** 経済学部卒業生諸君へ ***

経済学部長 武 暢 夫

学園ニュースに卒業生への一文を寄せるのは各学部長の慣例的な義務ともなっています。世の中には無駄が多いものですが、これもその一つでしょう。

よく考えてみると、改まった挨拶をするのは難しいことで、本人はよい話をしているつもりでも、聞く人がどれだけ共感してくれるかどうかは疑問であり、話し手と聞き手の気分が合わず、白けた空気が漂うのもよくあることでしょう。一般に、話し手が熱弁をふるえばふるうほど、聞き手の方は早く終わってほしいと思っている場合が多いのではないのでしょうか。万事にシニカルな学生諸君を相手にする場合は特にそうであり、よほど度ぎつい面白さでも盛り込まねば、耳を傾けてはくれないでしょう。しかし、残念ながら、私にはそんな才能はないのです。

実際、学部長の挨拶では、いつも後味の悪い思いをしています。昨春もいささか苦い経験をしました。卒業式の後、学部主催の卒業証書授与パーティーで学部長としての挨拶をさせられましたが、とても静かに聞いてくれるような状況ではなく、早々に切り上げるという始末でした。卒業式の緊張が解けたせいもあり、私の不徳のせいもあったでしょうが、そもそも真面目に語りかけようとしたのが失敗だったと思われます。証書を手に入れた彼らにとっては、学部長の話などはどうでもよかったのであり、早くビールを飲むことだけが問題だったのでしょうか。こんな体たらくですから、学園ニュースに載せた私の挨拶文などに目を通す学生がどれだけのいるでしょう。セレモニーの席とは異なり、学園ニュースには読まない自由があるのです。それゆえ、一生懸命に文章を綴るのは徒労に等しく、無駄なことは願ひ下げにしたいのですが、編集委員の先生が困るでしょうから、そういうわけにもいきません。そこで、しばらく駄弁を弄して、紙面をうめることにより、一応の義理を果たします。そして、この作業はすでに或程度まで進行しているというべきでしょう。

さて、これまで経済学部は、学生の行動に細かく介入することをよしとせず、総じて学生諸君の自主性と積極性に期待する方針をとってきました。私個人は、基本的にはこれでよいと思っていますが、最

近の学生諸君の全体としての行動形態をみると、この方針はどうも裏目に出ているような気がしてなりません。規制の少ない自由な環境は学生諸君の勉強意欲を育てるといふより、ただ安穩を求め、怠惰に走る傾向を助長しているのではないかとさえ思われるのであります。例えば、昨秋に第34回本学生経済ゼミナール富山大会が本学を会場に開催されましたが、主催校であるにも関わらず、本学部学生の報告は少なく、大会の準備と運営の努力を評価されたゼミ協の関係者諸君が男を上げるにとどまったのはさびしい話です。しかし、すんだことは仕方ありません。学生時代にもっと勉強しておけばよかったという声をときに耳にするのですが、今さら愚痴をいっても始まらないでしょう。勉強は学生時代に終わるわけではなく、気がついたときに再開すればよいのです。誰でも、多少は意味のある生活が続けようと思えば、死ぬまで勉強しなければなりません。まして、生死の競争を展開している企業の中にあって、生き残ろうと思えば、いやでも勉強を続けねばならないということになりましょう。もっとも、卒業生諸君のすべてが企業に就職するわけではないが、他の職業についたとしても、同じことです。

勉強は続けていかねばならないとすれば、後は職場の事情に応じて、各人ができるだけ柔軟に対応していけばよいのであり、私などがとやかく言う必要はありません。実際、在学中の行動形態からして、行く末を案じられたような学生たちが、数年後に礼儀正しい社会人に見事に変身し、それなりに活躍している姿を見て、その変わり身の速さと適応能力に感心させられます。経済学部の学生は潜在的な能力を秘めているというべきでしょうか。とはいえ、これまでの安楽な環境と異なり、それぞれの職場にはさまざまな困難が待ち受けているでしょう。自分の考え方や職場の論理がかみ合わないことも多いだろうし、無理解な上役や底意地の悪い先輩に悩まされることもあるでしょう。こういう場合に備えて、日頃から何事も話し合える友人をつくり、苦しいときには胸中を打ち明けあえるようにすることを奨めたのです。自らの生活は自らの責任と努力でまもら

ねばならないにしても、一人で考え込み、その挙句に追い込まれたような気持ちになってしまうのは愚の骨頂であります。もっとも、話す相手としては、職場の同僚などは足をすくわれる危険があるので、なるべく避けて、利害関係のない人たちを選ぶべきで、ゼミの指導教官などは最適でしょう。ただし、具体的な指針を求めると、失望することになるかもしれません。だが、身上相談というものは心のもやもやを吐き出すこと自体に意味があるのであり、打

ちあけてしまえば、実は大した悩みでもなかったという場合も多いのであります。平凡きわまる話と一笑に付されるかもしれませんが、昨年、私の知人に、誰かに相談しておけば、避けられたと思われる残念な出来事があったので、一言した次第です。

そろそろ紙面をうめる作業を終わってよいところまできたようです。卒業生諸君の御健闘を祈って、結びと致します。これは心からの念願であります。

卒業生 にお くる 言 葉

理学部長 小 黒 千 足

卒業、それは解放感にあふれ、希望に満ちた語感をもっています。事実、大学を卒業するとその後は半年に一度の試験など無いのが普通です。多分、皆さんは実社会に踏み出す期待に胸をふくらませているのではないのでしょうか。

それは正しいのです。私はここで実社会は厳しいとか、今までのように甘えてはいけない、など云うつもりはありません。それらは先になってから体験するかもしれませんが、今ここで繰り返しそれを告げることによりあまり意味があるとは思えません。

それよりも、あなたが大学を卒業したことで、何を得たのか、入学のとき心中に誓ったことは達成できたか、を振り返ってみて、自分にとって大学は何であったのかを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。次の話しはある対話の中からの引用です。「ある企業の方が云いました。“大学では白紙で人を送りだしてほしい。妙な習慣を付けてもらおうと困ります。教育は我々の方で入社してから致します。” 私はこれはとんでもない話だと思います。“会社は訓練するのであって、教育するものではありません。”と云うのですが、なかなか理解してもらえません。」

これは大変含みのある挿話です。あなた達は大学で何を得たのでしょうか。ある程度の知識、技術、教養を受け取るということは基本的なことで、大学を

卒業した人には当然備わるはずのことです。しかし、これらのそれぞれを手にしたからと云って、本当に教育を受けたと云えるのでしょうか。

ハーバード大学の学長が卒業式で云いました。「あなた達は今卒業する。これで教育を受けた人になるのです。」教育を受けたと云うことは、何を意味するのでしょうか。それは次の3つの条件を備えることです。まず、判断力があることです。何かが起こった時、それを正しく理解して的確な判断ができることで、画一的な反応しか取れないのでは、教育を受けたことにはなりません。第二には、論理的思考が出来ることです。例え画一的でなくても、その反応が論理的でなければ、意味がありません。また、ある出発点から論理的に結論を導き出すことが出来なければいけません。最後に、自らを明らかに表現できなければいけません。自分があるいは自分の意見を正しく表現できなければ、一人前にすら認められないでしょう。

以上の3点を備えて、はじめて教育を受けた人として認められることになります。ですから、いくら知識があっても、上の3条件を満たさなければ教育を受けたことにはなりません。

さて、皆さんは今日教育を受けた人として卒業して行けるのでしょうか。私は多くの危惧を残しながらも、全員にイエスと云ってほしいのです。

・×・×・卒業生の皆さんへ・×・×・

工学部長 作道 栄一

工学部・工学研究科を卒業・修了される皆さん、おめでとうございます。入学以来、今までの永年に亘る研鑽の結果、めでたく今日を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。愈々これから社会人として出発されることになりますが、それは結局、卒業・修了という一つの登竜門をくぐり出て、いよいよ各人の特徴ある人生模様を描き始めるという一つの大きい節目に当たるかと思います。私も過去において皆さんと同じ節目を迎えました。それから幾十星霜を経て今日に至っております。振り返ってみれば、その間にいくつかの大きい節目に遭遇しました。大きい節目に伴う小さい様々な変化を入れると、それはあたかも囲碁を囲んだときの軌跡に似ている様に思われます。今も勿論描き続けていますが。皆さんはどのような人生模様を描いて行くのでしょうか。二人で囲む囲碁の軌跡でさえかなり複雑です。まして種々雑多な要素が日常において関わってくる人生行路においておやであります。

これを描いていくにさいしての大きな要素は人生の課程における幾つかの出会いと、それに対応する平常の努力の二つであろうと思います。人生には兎角失意がつきものであり、これは諸君の誰もが卒論又は修論のための研究において体験したと思いますが、仕事ばかりでなく人間関係においても同様であるといえます。「これが人生というものだ」という言葉がありますが大変含蓄の深い言葉です。人間誰でも終始、順風満帆で進んで行けるということはありません。寧ろ波浪多き人生が普通でしょう。この行路を良い意味における「これが人生というものだ」という語に持って行くためには、矢張り日常の努力

が唯一の方法かと思います。日常の工夫と努力（仕事においても、人間関係においても）が種々の障害を除去してくれるものと思います。良い出会いを得るためには十分な努力がなされていなければならないのです。今からの長い人生行路においてどの様な好ましい模様を描くかは、どの様な好ましい出会いがあり、どれ丈の努力がなされたかによって決まってくるものと思います。

今、我が国の産業界は技術の革新に向けて、當に激動期にあります。我々エンジニアにとっては、これは困難であるけれども、反面好ましい一つの大きい出会いに他なりません。我が工学部卒業生は困難なまたは厄介な出会いに対しても、只単に利口にしてい且つ避けるように立ち廻るということではなく、なんとか工夫を重ねて乗り越えて行くという能力を、その特性として持っていることを（産業界でも認めています）私たちは皆誇りに思っています。

皆さんには今後の社会活動において多くの良い出会いがあることを祈念しておりますが、不幸にしてそれが逆風であっても持前の気質で何とか工夫・努力によって風向きを変え、結果として良い出会いに変えて行く気概と信念をもって当たられることを念願して止みません。産業界が皆さんに期待している技術的イノベーションに対しては、このことが必要不可欠の要件と思います。このことが引いては自分の人生哲学を社会に及ぼすことのできる王道かと思えます。

今後は何卒、健康に留意され、益々の御健闘を祈念しております。



経営短期大学の卒業生諸君へ



経営短期大学部主事 武 暢 夫

本年1月1日から、経営短期大学部主事を併任しております。私は、これまで何回か本学部に出講したこともあります。最近では管理運営に酷使されているので、すっかり御無沙汰しています。だから、諸君とは校舎のどこかで擦れ違っているかもしれないが、親しく接する機会はありませんでした。しかも、今年は本学部が閉学の日を迎え、諸君が本学部最後の卒業生になるという銘記すべき年であります。しかるに、私が、おそらくは、本学部最後の主事として諸君を送り出そうというのは、大役にしては人を選べないものというべきでありましょう。

そもそも、このような役柄は、本学部の発展のために懸命の努力を払ってこられた本学部生え抜きの先生にこそ相応しいのであります。おそらく、諸君も同じ思いではないでしょうか。しかし、残念ながら、いろいろの事情でそうもいかず、私が引き受けるのやむなきにいたったのであります。ただ、私は、本学部に対しては少なくとも精神的支援は送ってきましたし、御承知の昼夜開講制への経済学部改組に当たっては、経営短期大学の行詰まりの打開のために、私なりに努力したつもりです。こうした点を了とされ、主事としての挨拶を受けていただければ、幸いであります。

まず第一に、3年間にわたる諸君の努力を評価したいと思います。一口に「働きながら、学ぶ」といっても、いうほどには容易なことではないでしょう。これは単に口先だけのことでなく、管理職になって、諸君の苦勞が実感をもて推察できるようになりました。

朝から会議等の連続で夕方になって、やっと一息つけるような日には、年のせいもあるでしょうが、本を開いてみても、さっぱり集中力がなくなっています。それでも、われわれは時間のやりくりが或程度は自由にできる立場にあります。だが、諸君の方は勤務時間に制約され、第1限の授業に出席するためには、1日の勤務の疲れを癒し、ゆっくり夕食をとる暇もなく、登校せねばなりません。実際、職場の都合で遅くなったのでしょうか、急いで教室に駆け込んでいく学生諸君の姿をよく見かけたものです。

3年間、ともかくも勤勞と勉學を両立させるためには大変な苦勞があったと思われるのであり、その苦勞によく堪えたという点で、諸君は大きな自信を持ったことでしょう。

とはいえ、夜間の教育は授業コマ数が少ないだけでなく、他にも様々の制約があり、十分満足に勉強できたというには程遠く、物足りない点が多かったことでしょう。また、諸君の努力に報いるに、その社会的評価はあまりにも低いものであります。そして、そうしたことが本学部の行詰りの大きな原因ともなったのであります。側聞によれば、ブラジル等では夜間学生のほうが高く評価されているそうですが、日本では学歴社会の壁は容易に突破されそうにもありません。しかし、希望を失ってはならないでしょう。形の上で報われるところは少ないとはいえ、「働きながら、学ぶ」習慣を身につけたことは、諸君にとって、貴重な財産となりましょう。近年、生涯教育の必要が叫ばれていますが、こんな事を改めていうまでもなく、誰でも意味のある生活を送るためには、可能なかぎり学び続けることが必要です。しかも、平均寿命が高まり、社会が目まぐるしく変転する状況にあっては、この必要は益々増大しています。この点、諸君はまさに貴重な財産を手に入れたというべく、この財産をさらに大きくするよう努力すべきでありましょう。3年間にわたっての「働きながら、学ぶ」努力は、これを続けてこそ意味があるのであり、続けなければ、殆どその意味を失うでしょう。どうか、努力を続けて下さい。私のいいたいことは、この点に尽きます。

さて、経営短期大学部はやがて姿を消すことになります。夜間主コースができたとはいえ、組織も別なら、名称も違うのであり、母校がなくなるさびしさが完全に解消されることにもならないでしょう。けれども、ひとりよがりかもしれないが、夜間主コースの存在はやはり一つの救いではないでしょうか。一つの村がダムの中に沈んで、跡形もなくなるのとは異なり、経営短期大学部における勤勞者・社会人教育の伝統は、経済学部夜間主コースにおいて、これまでと同じ所で、いつまでも生き続けるのであり

ます。

そして、夜間に学ぶ学生の努力に正当な社会評価が与えられなかった無念は、いつの日か、夜間主コースの学生諸君が晴らしてくれるでしょう。われわれも、そのような日が一日も早く訪れるよう努力するつもりであります。諸君は経営短期大学部の最後の

卒業生たることに誇りを持ち、いっその努力を続けて下さい。そして、母校たる経営短期大学部を懐かしむとともに、経済学部夜間主コースを新しい母校として、いつまでも愛情をもって見まもっていただきたいと思います。

卒業生諸君のいっその御健闘を祈ります。

◇◇◇ 昭和 6 2 年 度 停 年 退 職 者 ◇◇◇

教育学部	文部教官	教授	藤 井 敏 孝
経済学部	"	"	棚 田 良 平
理 学 部	"	"	田 中 専一郎
"	"	"	久 保 和 美

工 学 部	文部教官	教授	位 崎 敏 男
"	"	"	広 岡 脩 二
"	"	"	吉 田 順 作
教 養 部	"	"	杉 本 新 平

停 年 退 職 に あ た っ て

教育学部教授 藤 井 敏 孝

停年を迎えるにあたり、誰しも感慨なしとはしないであろうと思う。「富山大学教員の停年に関する規則」は、「停年」という語を用いているが、これは引き続き勤務を大学が強制的に停止するために設定した年令の限界という意味で、近年用いられる「定年」は、停年に到らずして自主的に自ら設定した勤務年限の限界を指すと解釈する。私個人としては、停年か定年か、何れであるべきであったかは、現在ではその判断に苦しみというのが真実の心境である。

今日まで数多くの先輩たちの停年にあたり、「おめでとう」と祝賀の意を表しないで、「長い間ご苦労でした」と労を稿うのが一般的であり、私自身もそのような挨拶をしてきた。大学という組織のなかで、個人的関係と制度的関係を通して、他者との関係的生命における自我の形成が可能であったことは、愛すべきことであったと思い、このことは他者に対する感謝へと連って行くのである。

私は、旧制度の大学文学部で、「教育学」を専攻し、新制度の大学の発足と殆ど時を同じくして、教員養成の大学（学部）に勤務してきた。教員養成の大学（学部）とは、「教員養成はすべて総合大学及び単科大学において……これを行うこと」という

教育刷新委員会建議に基づいて制度改革がなされ、新制国立大学の成立に伴い学芸大学（学部）、教育学部となった新しい制度の大学のことであった。そして、そこでの教職の原理と教員養成の理念を大きく方向づけたのは、昭和21年教育刷新委員会が、「教員養成は総合大学及び単科大学に教育学科をおいてこれを行う」という議決であったが、それが教職のアカデミズムとプロフェッショナリズムをめぐる論争、「教育学」そのものの学問性に対する疑念やその学問水準と実践の有効性に対する疑念、これに対する教育者精神の育成のための教育内容と狭い意味での教育技術学の有効性の主張の論争を生み、その決着は「学芸大学」におけるリベラルエデュケーションを中心とする大学（学部）を国立大学に設け、これを教員養成を主とする機関とするということであった。これは戦前の養成制度の論争に終止符を打つための一つの妥協案であって、その後、養成制度の手直しがなされるたびに、そのことは常に教員養成制度の在り方をめぐる歴史的要因をなし、現今では教育学部が教員養成を目的としない新課程を設置するという問題にまで展開している。四十年の学部の発展課程を顧みて感慨深いものがある。

教員養成学部の必須重要教育内容である教職科目

としての教育学の有用性、実践性は、学会でも常に論議の対象であった。そうした論議はまた広義の教育学を専門とした私の主要関心事の一つでもあった。このことは私が教師養成の在り方に深く関与してき

たことの結果でもある。この意味で有意味にして楽しい大学生活であったことに感謝せざるを得ない。

これからの生涯学習の充実を期していることを述べて擲筆する。

~~~~~ テイネン タイカン タイショク ~~~~~

経済学部教授 棚 田 良 平

富山県で生れ、富山県で育ち、富山県を離れ、そして望郷の念にかられ母校に帰ってきたわたくしが、またこの地を去ることになりました。

「オレはいったいなにをしてきたのだろう」新年を迎えるたびに、誕生日が来るごとに、そして家内からグチを聞くつどに感じたこの想いが、いま、よりいっそう強く身にしみます。

語呂合わせ風に、わたくしのテイネン・タイカンを表現してみました。

低年……いまにして思えば、ワタシは志が低かった。しかし、もう遅いと「諦念」してます。
底捻……研究費のことではなく、チェのことです。
停然……ワタシの研究進捗状況。ボケないうちにガンバラナクチャ。

訂年……これができて、もう一度「丁年」に戻れたら、一生懸命勉強もし、恋愛もするのに――。

大甘……女性に対しては、いまでもそうです。

大患……あの時はガンと覚悟しました。その節は、ご迷惑をおかけいたしました。

耐寒……ひどかったなあ、あの豪雪は――。

待寒……トンデモナイ。

滞緩……ワタシの生活態度を示す。お耻かしい。

怠陥……同上。

大旱……ワタシの脳味噌。サッパリ原稿が進まない。

退色……トシだから、スカタネェだろ。

大食……これで糖尿になりました。

太殖……駄目だったなあ。財形貯蓄でもしておけばよかった。

待職……その必要もなく、お蔭様で再就職できました。

最後に、みな様より賜りました御高情の数々に対し、厚くお礼申し上げます。

おわり

~~~~~ 私 の 授 業 ~~~~~

理学部教授 田 中 専一郎

私が文理学部数学教室に赴任したのは、いまから30年前の昭和33年のことである。文理学部校舎はまだ蓮町にあったが、蓮町以来の特に数学教室の思い出は、理学部同窓会創立30周年記念誌（1984年）に、初代2代にわたるコンピュータ導入の頃については、これも1984年計算センター年報（最終号）にのせてもらった。この他、学内紛争を含め、共通一次（準備段階の昭和48年から関係していた）や本学での日本数学会開催など思い出に残ることは多い。

赴任後間もなく、前任の九大で行った講義のやり

方を改め、それと全く正反対と思われる学生が本当に理解してほしいという講義を続けてきた。長年にわたり多くの学生が私の講義を聞いてきたが、学生一人一人に利害得失があったことは十分承知している。私は数学なので、本学としては特殊の場合に属するが、この紙面に書かせて戴ければ幸いに思う。

定理の証明には流れがある。個人差はあるが、定理を証明するとき、これとこれとこれを証明すればよい。そして、それぞれのところをどの様に証明するかを工夫する。全体を通じて見直しがきいて分か

り易いようにするのが証明のポイントである。

先生と学生とでは、分かるという程度にも相当の違いがある。講義のときには学生向けに十分アレンジして行るのが普通である。

私が本学に赴任した当時、上にのべたことよりもっと丁寧に講義したつもりでいたが、学生数が1学年3、4名しかいないこともあり、全員が全く理解出来ないこともあった。勿論学生全員が感ずら全く働かず、お手上げの状態である。

このときの術語の定義は学生がわかっているとしても、本でいう行間が全くつながらないのである。当時は本学生の殆ど全員が高校の先生になり、数学者になろうとする者が少なかったので、学生全員が理解出来ることを目標に講義をおこなうこととした。どのような講義を行ったかは後に述べる。

さて、いまでも変わらないと思うが、大学で数学を学ぶ目標の一つは、自分で数学の本が読めるようになることである。勿論、行間のかくれた部分も理解出来ることを含んでいる。

数学に限らないと思うが、くり返し本を読めばそれだけその分野の術語にもなれ、常識もふえて、次第に理解が深まるようになるものである。しかし、他の分野にもあると思うが、数学ではある分野を初めて読むのは容易なことではない。一般的に言って、初めの2、3ページは容易に理解出来るが、10ページ位にまで進むと殆どの学生が全く理解出来なくなるのが普通である。

数学の本の一つの読み方として、このようなとき、理解力と記憶力とで、断片的でもよいから強引にいくついても本を読んでいくというものもある。ここで本を読むというのは、理解するというより出来るだけその本になれるという意味である。また他の本を参照しているうち、よく出てくる術語や定理にも次第になれば、突然目の前がパッと明るくなり、本当に本が読めるようになる。このような本の読み方が出来ると、他の新分野にも入っていけるので、相当に自信がつくのもである。しかし、数学科の学生全員が、このような読み方が出来るとは限らない。

私は学生全員が講義を理解し、本が読めることを目標に講義を始めた。講義のテキストを定め、例えば定理等の証明においても行間を埋めることに重点を置いた。即ち、1行1行ごとに、ここに書いて

あることがどうして成り立つのかを正確に論理的に述べることにした。一般的に行間を埋める方が、定理自身の証明より行数が少なく、考え方が簡単であるからである。勿論このときの必要な術語の定義は改めて述べるし、必要な定理もくり返し述べることはいうまでもない。このようにすると一つの定理で10位の問題は出来る。ここまで準備をすると簡単な論理の問題となり、殆どの学生が講義の内容を理解してくれる。学生が理解しているがどうかのチェックする方法は、次のようにしている。

私は、長年に渉りつぎのようにして出席をとってきた。B4の用紙を16枚に切り、科目名と日付のスタンプをその日によって適当な位置に押す。授業の前に過不足のないよう一人一人にこの用紙を配り学籍番号と氏名を記入してもらう。質問するときは、この用紙をまぜて一枚をとり指名するのであるが、エスケープしている場合は直ちにこの用紙を破ることにしている。

質問にはヒントを加えることもあるし、隣の人から聞いてもよいという場合もあり、質問の仕方はいろいろである。また、全くわからないか、少しわかるか、大体わかるか、よくわかるかの、4つのうちからこたえてもらうこともある。わからないといっても減点するようなことはなく、むしろ質問に答えれば、何らかの形で点が増すようになっている。

この講義に欠点はいくつかある。定理などの証明はローカルすぎて証明全体の流れが見えないことである。しかし、ローカルに分かっていれば、テキストの証明を自分で見直せば、証明の流れがわかってくるものと思う。第2の欠点は、徹底的に精しく話をするのでページ数が進まないことである。テキストの後の部分に書いてある重要な定理が説明出来ないで講義が終わったりする。なんでも話しておけば、学生のどこかに残っていると思っている先生がおられるかも知れないが、逆に全く残っていないこともありうる。

この講義の最大の欠点は、他の講義のようによく勉強すればそれだけよく分かるということはなく、勉強意欲をそれ程誘わないことである。しかし、講義がよく分かったからゼミに付こうとか、大学院へいこうと思ってくればそれでよいと思っている。

いまの学生の中にも、先生になったらあのような

教え方をしたいという者も何人かはいるが、大学以外では、このような特徴ある徹底した講義は出来なかったと思う。

終わりにのぞみ多くの方々の御援助、御協力により、無事今日を迎えることが出来ました。心から感謝して、筆を擱くことにします。

定年退官のうた

理学部教授 久保和美

年々歳々、花あい似たり

歳々年々、人同じからず

これは、御存知のように、いわゆる劉廷の詩の中心となる部分で、わが国ではよく知られている。

この学び舎に40年近く御厄介になったが、時は巡り、とうとう、ぼくの番が回って来た。ある人が、かつて「母校は校舎だけが残る」と云ったことがあるが、劉廷の詩はそれを巧に記述している。世にいう“無常”はここにもある。この“無常物語”は方丈記にもあるし、平家物語にも書かれている。勿論、扱っている内容はそれぞれ異なっているが、基本的には、世の無常をうたっていることには変わりがない。その意味で、わが学び舎についても、ぼく自身のことについても、この無常の時の流れを念頭におきながら、いま学び舎を去ることができる。そんなとき、感無量と感ずる人もいるだろうし、何かを語りかけたくなる人もいるに違いない。だが、それらをすべて胸の中に押し込めて、「老兵は、去りゆくのみ」と云い残して去って行った人もいる。その人の、そうなった経緯を考えると胸中、決して穏やかではないような気がしてならない。

それは何年か前の事であった。入試に関し、わが生物学教室としての受験科目に“数学”が必要であるか否か論じた事があった。ぼくは当時、簡単な数式を使って、生物の、ある事象のおこる理由を考えていた。そのぼくを除いた教室の大多数の意見は、受験科目に“数学”は不要であると云う方向にあった。この論戦の結果、尾ひれのつく出来事もあったが、結局は、ぼくの主張は通らなかった。「負け犬」となったぼくが、今ここで何を云っても始まらない。“老いの繰り言”になるだけのことだ。尽きるところは、やっぱり、「老兵は去りゆくのみ」である。

このような教室のゴタゴタは、巨視的に観れば、小さな、小さな出来事にすぎないが、それらがいつ

の間にか加算され、世の中は少しずつ変わってゆく。わが教室も例外ではない。その有りさまを“奥の細道”では、その冒頭に、

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也
舟の上に生涯をうかへ馬の口とらえて老をむか
ふる物は日々旅にして旅を栖とす
とある（岩波文庫、100）。

しかし、現世では、この変わりゆく“旅の姿”を「21世紀に向けての抜本的見直し」と位置づけ、強引といってよい程に、改革を断行する。その都度、現場の我々は、右往左往する。入試日程の複数化は、その一例だ。そう云う改革の嵐が吹き荒れる世相の中にあって、わが“旅人”の“持ち時間”は次第に残り少なくなり、通いなれた学び舎を去る時が、いま、やって来た。学び舎の正門に、しばし、立ち止まって「さらば、わが学び舎よ」とぼくはつぶやいて、いま来た道を振り返るであろう。そこには、ひと回りもふた回りも大きく育ったユリノキの並木道がある。そう云う情景を想像すればするほど感傷的になる。と同時に、これは未知のシャバへ飛び出したばかりの自分の姿だ。

春まだ浅い2月のある晴れた日に、耳にするヒバリの声は、まさに北陸の“早春賦”だ。残雪が遠くの山肌に見られる越の国の春は、この鳥の鳴き声に目覚め、カエルの合唱までつづく。野に山に百花爛漫の色どりを添えるのも、もう、そう遠いことではあるまい。今まで結構、忙しかった仕事から解放されたぼくは、今年こそ、ゆっくりと、この風情を味わって見たい。ぼくの喜びのうたはここにある。いや、「ここに幸あり」と云った方がよいかもしれぬ。

想えば、この学び舎の庇護のもとに、なまぐさい人の世をよくも無事に、ここまで歩いて来たものだ。ぼくの人生は、この先、どうなるか知る由もないが、

ひとまず、今までお世話になった多くの教官や事務の方々、それに卒業生諸君に、この紙面を借りて御礼申し上げる。改まってそんな挨拶をしなくても、とも思われるかもしれないが、“一寸先は闇”と云うこともあるし、定年退官後では時期を失する。

「定年退官」は、その人の人世にとって大きな節目となることには相違ないが、要は、“定年”と云う季節はずれの年末だ。「ゆく年、くる年」の一年の行事が、いま始まったと云うことである。“初詣”の神前に、何を祈願し、何を諸君が教室へ期待しようと、最早、ぼくには関係がない。ともあれ、ぼくは、この学び舎に、昭和生れの新たな芽ばえと、発展を期待しよう。ちょっぴり寂しいが、ぼくら“大正生まれ”の世代は、この教室では、ぼくを最後に幕が下りたのだ。

馴れぬ作文のため内容が少々、寸足らずの点が無きにしもあらずではあるが、この辺で“蛍の光”な

らぬ“思い出のアルバム”でも唱って、この学び舎での出会いを、ひとまず、締めくくり、オヒラキとすることにしよう。因みに、この“思い出のアルバム”は、その歌詞の内容から云って幼稚園の卒園のとき、よく唱われる歌だと聞いたが、ぼくにとっては、ぼくの“定年退官のうた”にふさわしい歌だと思っている。メロディーも素敵だ。長いこと、この学び舎におりながら、大した仕事もしなかったぼくが、それに上乘せして下手な作文を書くより、このうたの方がよっぽどよい。ぼくは、この学び舎からシャバへ一歩踏み出したばかりの一年生である。

ではまた、いつの日か、どこかで、お会いすることがあるかも知れぬ。お互いに達者で……。

かたかごを引っぱる風の吹きにけり

(石田勝彦、折々のうた、朝日)

▽▲▽ 退 官 に あ た っ て ▽▲▽

工学部教授 位 崎 敏 男

長い間お世話になった、思い出多い大学を去る日も間近となりました。そう思って見ますと、日頃見馴れた筈の学内のたたずまいも、なんとなく目新しく新鮮なものに感ぜられる今日此頃であります。

戦後間もない昭和21年1月、工学部の前身旧制高岡工業専門学校に赴任しましたのが、本学との最初の出合でありました。当時は私も夢多き二十代の若者でしたが、月日のたつのは誠に早いもので、気が付いてみますと何時の間にか老耄の齢となって、大学の生活も40年を超えてしまいました。いま定年を迎えて、あらためて過ぎた日々を振り返りますと、徒に馬齢を重ねた悔ばかりが思われて、いささか忸怩たるものを禁じ得ません。まさに「少年老易く、学成難し」が只今の率直な心境であります。

何時の時代もそうでありましょうが、この42年間も誠にめまぐるしい、激しい時代であったように思えます。そうした時代の変転の中で、大学もまた大きく変わりました。私が勤務した工学部について見ましても、いろいろと迂余曲折を経ながらも、創設当時の姿を想像することさえ難しい程に大きな変貌

をとげました。時の流れと申しますか、歳月をかけて築かれた歴史の重みといったものをしみじみと感じます。大学はこれからも、更に更に早いテンポで変わってゆくことでしょう。そうした新しい飛躍への息吹きをひしひしと肌を感じながら、厳しかった歴史の一齣一齣を今は懐かしく思い起こしております。

いささか余談になりますが、かつてのミスター・ジャイアンツ長島選手は「わが巨人軍は不滅であります…」という言葉を残して球場を去りました。アンチ巨人の私には当時この言葉に何か馴染めないものを感じましたが、節目を迎える齢になってみますと、彼の心情がなんとなく理解できるような気がいたします。この短い言葉の中に、巨人軍の輝かしい歴史の中の一齣に参加できた事への喜びと、次の時代を担う人達への熱い期待が込められているように私には感ぜられます。もしそうだとすれば、私も自分なりのおもいを込めて「わが富山大学は不滅であります。」と心ひそかに念じながら大学を去りたいと思います。

長い間本当にお世話になりました。ご指導ご支援を戴いた多くの方々に心から感謝いたしますと共に、

皆様の益々のご発展ご多幸をお祈り申し上げます。

(昭和63年2月15日)

*** 定 年 雑 感 ***

工学部教授 広 岡 脩 二

鳥も人も死の直前になると、それぞれよい声で鳴いたり、気の利いた辞世の言を残したりすると、漢文の授業で習ったことがあります。定年に直面しても、小生にはとてもその真似すら出来そうもありません。富山大学奉職三十六年以上、吾が人生の大半をこの大学で過ごすことになるとは、当初は全く予想しませんでした。旧制富山高校に中・高併せて七年間在学した頃までは、少しは余裕をもって諸事に臨んだり、対処した記憶がありますが、太平洋戦争が始まってからは、大学生、兵役、会社員、高校教諭と、目まぐるしく変遷する社会の流れにほん弄され、慌ただしく日を送り、気が付けば、富山大学工学部の一隅に、教官として漂っていた次第。交際下手ながら、その間職務上やその他で、お知り合い頂いた方々は大変に多く、定年を前に、走馬灯の如く思い出され、深い感謝の念に耐えません。何の取り柄も無く、気難しいだけの小生でも、等しく抱擁してくれるこの現世の懐は、底知れず深いように思えます。

さて、一時はこの先どうなることかと思わせた学園紛争を境に、入試制度の度々の変更の影響も付け加わってか、教官と学生の間がよそよそしくなったと思うのは、小生だけでしょうか。中学の旧師が、入学後の初授業で、名簿も見ずに、生徒（定員80）を次々と姓名で呼んで、質問されたり、大学の化学科の中の廊下を小走りに急いでいた、目立たぬ学生であった小生を、すれ違いざまに姓で呼び止め、走らぬようにと注意された化学科の教授の例に比べ、担当の四年生の姓と顔が一致するまでに要する日時が、年を追って永くなって、我ながら良い教師で無いと反省せざるを得ません。定年制の所以も納得されます。新築の五福にきてみると、せめてもう十五才程若かりせばと思ったことも無い訳ではありませ

んが、建物が立派になっても、新しい皮袋に古い酒を盛ることにならぬよう、後続新鋭の皆さんにお願い致します。鉄は熱い打ちに鍛えよとか、少年易老

学難成は周知の文句ですが、冷めた鉄や学不成の老年は、邪魔にならぬよう、身を処することも大切と自戒しております。科学・技術の激しい変化・進展に応じ、工学部も学科、講座の大改編の準備中ですが、それと共に、新陳代謝により、教官陣容が第三世代に移りつつあるようです。目前の事象に囚われ過ぎて、大学の本分の一つ、即ちより賢き次世代の育成を忘れること無く、学内外から人材をスタッフに選んで、将来の発展の基礎を築いて頂き度く存じます。

私は今、研究室の窓から眺められる、青く澄んだ空の下に輝く冠雪の立山・剣の連峰の雄大さ、強さと美しさに打たれています。高岡では気付かなかった景観で、旧の高校生時代から、何度見ても見飽きません。その窓のすぐ下には、三本の槐（えんじゅ）が見えます。拙宅からの苗木を、高岡の旧舎の横に植え、除草剤や虫害から守って中位の丈に育ったものを、五福に移植してもらいました。槐が三本あると、その家からすぐれた人が出るとの話を聞いているので、将来が楽しみです。富山大学と共に大成して、「槐の木も残った」となる日の来ることを、心待ちにしております。

想起こそば、夜遅くまで共に実験に頑張った沢山の卒業生の方々、きじや野兎の出没する銀杏、ポプラ、鈴かけの丈高な並木に囲まれた懐かしいが、今は無き中川の旧校舍、名古屋大学やミシガン大学で送った、国内外の俊英の中での学外研究の日々等思い出の尽き無い、色々の経験を積む機会を与えて頂いた、大学当局並びに関係の方々に、厚く御礼申し上げます。

富山大学千夜一夜（公開講座委員会あれこれ）

工学部教授 吉田 順 作

1 はじめに

昭和54年1月31日にNHKを定年退職、翌2月1日付の発令で、上野発のL特級『白山』に乗って富山に着いてから9年間、アッと言う間に過ぎたようにも思いますが、色々印象に残る事もございました。2月20日に開催して頂いた『最終講義』では、44年に亘る私の研究履歴のあらましをのべさせて貰いました。この要約は『工学部紀要』に執筆しましたので、ここでは9年間の富山大学時代の中で一番印象深かった『公開講座委員会』あれこれについて思いつくままに書いてみようと思います。

2 全学的な公開講座

富山大学に『公開講座委員会』を設ける事が『評議員会』で決まったのが、昭和57年11月。同月の工学部教授会で私と八木教授が委員として選出されたものであった。

第1回の委員会が開催されたのが12月中旬、柳田学長が座長をつとめ『委員長選出』、教養部の藤井教授が委員長に決まったところで退出。F委員長司会の下に議事に入った。

『公開講座』というものは、地域社会に対して開かれた大学のイメージを…という意味合いがあるから、実施するのが望ましい位の事は各委員の理解の中にあった。が、企画を委員会がたてるのか、下より上ってくる企画の是非を委員会で審議するのか、そのあたりはどうなのか？。全学的な公開講座の定義は？。等々議論が百出して収拾がつかず流会となったものだった。

1週間後第2回の委員会を学長も出席して開催。前向きの姿勢で委員会が企画を…というコンセンサスに到達した訳であった。

年が明けての第3回委員会で自由討議の末、『現代の……』というテーマでなら全学的な公開講座の企画をたてられそうだと、それぞれ次回までに考えてきましょうという事になったように思う。

『現代のコミュニケーション』というのはどうだろう？と八木教授が私に囁いたのが、この席であった。私も別に考えていた構想はあったのだが、C&Cというのが一般語で通ずる時代相、「このアイディ

アを頂き」という事で企画の構想を練る事とした次第であった。

『はじめに言葉ありき』という様に、言葉の問題はコミュニケーションのカテゴリーに入れられるし、記録・記憶の問題も時間をおいてのコミュニケーションと考えられるから各学部からの講師をお願いしての『公開講座』を構成出来そうだと、人文学部3名、理学部2名、経済学部1名、経営短大1名、教育学部1名、教養部1名、保健管理センター1名、工学部5名の講師と演題案を、第4回委員会に提案して承認を得たものであった。この頃は永い間の懸案であった『工学部の五福移転』が、柳田学長と高岡市の話し合いが軌道に乗って…という時期であったようで、数日後藤井委員長より次の様な電話がかかってきた。

「Y学長からの希望なのですが、工学部の移転の件では高岡市に大分お世話になったので、お礼の意味で公開講座の1つは高岡市で開催して貰えないか？という事ですので、貴方のコミュニケーションを高岡で開催してくれませんか」

そんな訳で、この公開講座を工学部移転に伴う『お別れ講座』という意味合いを持たせようと、金属・機械・化学の先生も講師に動員しての下記20講の『公開講座』として、企画し実施した次第であった。

- | | | | |
|---|-------|----------------------------------|----------|
| 1 | 10/12 | コミュニケーションと人類文化 | 和崎洋一（人文） |
| 2 | 10/14 | 言語とコミュニケーション | 鈴木敏昭（人文） |
| 3 | 10/17 | コミュニケーションにおける情報 | 四谷平治（工学） |
| 4 | 10/19 | 世界の文字と言語 | 藤本幸夫（人文） |
| 5 | 10/21 | 地殻構造にみる古代とのコミュニケーション | 広岡公夫（理学） |
| 6 | 10/24 | 社会構造の変革に伴うコミュニケーション技術の変遷とそのインパクト | 吉田順作（工学） |

- 7 10/26 経済活動とコミュニケーション
武井 勲 (経済)
- 8 10/28 行政と国民とのコミュニケーション
篠原 巖 (経短)
- 9 10/31 自然水との対話におけるトリチューム
など同位元素の利用
水谷義彦 (理学)
- 10 11/2 化学工学における情報とコミュニケーション
島崎長一郎 (工学)
- 11 11/4 変貌しつつある化学工業 (化学工学から
市民へのコミュニケーション)
若林嘉一郎 (工学)
- 12 11/7 言外の意味とコミュニケーション
梅村智恵子 (教養)
- 13 11/9 教育におけるコミュニケーション
宮崎州弘 (教育)
- 14 11/11 心霊とのコミュニケーション
中村 剛 (保健)
- 15 11/14 コミュニケーション技術の動向
美細津博 (NTT)
- 16 11/16 生体電子工学とコミュニケーション
八木 寛 (工学)
- 17 11/18 エネルギーと文明
風巻恒司 (工学)
- 18 11/21 金属とコミュニケーション
多々静夫 (工学)
- 19 11/23 最近のコンピューター
松田秀雄 (工学)

20 11/23 コンピューターとの対話

米田政明 (工学)

受講申込みが30名余、聴講者が10~20名という状態ではあったが、各講師の方々の熱演は素晴らしいものであった。わたしもオーガナイザーをした責任上、3~4を除いて聴講させて貰ったが、他学部の先生の学問的な話しに触れることが出来て、長丁場で疲れはしたものの大きな収穫を得たと思ったものであった。

以来、『公開講座のオーガナイザー』を勤める事が病みつきとなり、

59年度 現代史に学ぶ

60年度 現代史に学ぶ (その2)

61年度 現代史と現代

62年度 現代を考える

と5年に亘り公開講座のオーガナイザーを勤めてきた。お蔭で講師をお願いした先生を通じて、他学部にも多数の知己友人を持つ事が出来、特に60年秋工学部が五福に統合移転してからは、楽しい学園生活を過ごすことが出来たのは望外の幸せであった。

3 あとがき

以上公開講座委員会発足の頃の思い出を述べてみました。公開講座は何といっても地域社会に開かれた大学の窓という意味合いが大きいようです。熱心なファンの方々も20~30名おられます。今後ともこれらファンの方を失望させぬよう『公開講座』の活性化を願い筆を置く事と致します。 一以上一



退官にあたり思ひ出づるまゝに



教養部教授 杉 本 新 平

富山大学開学以来、約四十年の間、本学に勤めて参りましたが、この三月で無事定年を迎えることが出来まして、我ながらめでたく思うと共に何よりの感謝であります。四十年の歳月は長くもあり、また短くもありました。この間、昭和四十二年春文学部から教養部が独立したことで、そして引つづいて発生した大学紛争とは、私の記憶に最も顕著なものでした。大学の在り方、教育の在り方が問はれた大学紛争も終わってみれば、あれだけのエネルギーを

燃焼したにも拘らず、その後大学に対して殆どよき影響も痕跡も印刻しなかったことは今も残念に思われます。

御承知のやうに新制大学は旧制の高校、専門学校が格上して大学となったものでありますが、専門学校は看板を塗りかへさへすればそのまゝ工学部薬学部経済学部教育学部として更新されましたが、旧制高校のみは学科の多様性の故に、専門教育機関として一つの学部にとまるのが非常に困難でありま

したので、彌縫的に、文理学部といふ曖昧な学部として発足いたしました。その後文理学部は全国的にも殆ど人文学部理学部の二つの学部に分離独立して、やうやく専門学部の体裁を整へることになりました。旧制高校は明治以来の日本の教育制度において、小学校（初等教育）と共に、最も成功した教育課程であることは萬人の認めるところであります。たしかに旧制高校は全学生の憧れの的でありました。然るに新学制と共に、旧制一高はじめ全国の高校はそのすぐれた伝統を継承することが出来ず、主として大学の前期課程を担当する部局に変易してしまひました。そして専門学部の予科的存在か、教養課程無用論に見られる余計もの的存在になって居ります。これは日本の教育にとって実に重大なマイナスであります。戦後教育の見直しを叫ぶ臨教審に於ても、はたまた国大協に於ても、このことが本当には意識されて居りません。大学が専門的職業教育のみで善しとするならば、専門学校のみでよく、敢へて大学とした意義は見出されないものであります。

私は新制大学発足当初から、旧制高校は教養学部となり、最もすぐれた人材の育成、全人的教育の場とすることを切望して居りました。爾来四十年、その実現を念じつづけて参り、今もこの考へに一片の変心もありません。たゞ問題は、教養学部が学部である以上、教養といふまとまった一つの学問体系或いは教育体系が確立されなければならぬことであります。勿論、教養は単なるディレクタントや装飾的附属品であってはなりません。「教養とは個性のうちに一つの世界を作り出すことである」といふフンボルトの言葉の如く、教養とは即ち自己習練であり、学問による人間性の開発であります。日本の歴史において、日本の代表的教養人といはれる人々——古くは聖徳太子、空海、最澄、道元、仁斎、徂徠、そ

して近くは福沢諭吉、鷗外、漱石、新渡戸稲造や鈴木大拙、内村鑑三や岡倉天心など——に共通の大きな特徴は、外国語が極めて堪能であったこと、そしてこの語学力の上に、それぞれ専門のすぐれた学識を修得してゐたことであります。旧制高校は欧米に於ける教養人必須の古典語教育に替へて、英・独・佛の外国語教育を重視し、外国語を通して世界に眼を開かせ、人格の陶冶を心掛けました。そもそも教育の目的は技術の習得にではなくて、基礎能力の礎定にあるといはねばなりません。私はこの基礎能力の礎定といふ最も原初的な本源的教育をめざす教養学部の制定こそ現下の急務であると存じます。そして旧制大学はすべからず、いはゆる大学院のみの大学、いやむしろ国立の総合学問所として再生すべきであります。学校は教師と学生、則ち教へるものと教へられるものから成立しますが、総合学問所においては、教へるもの教へられるものの区別なく、すべてが学問の前に同列の研究者であるやうな機関とし、今日の大学附属の大学院（修士課程博士課程）は全廃してこの学問所に統合し、学問研究の成果を目ざすべきであります。現在の大学院制度のやうな単なる修業年限の延長は決して望ましいものでなく、オーバー・ドクターの現実には社会問題化とさへなっております。総合学問所においては、すべての人が研究員でありますので、ここにこそ任期制契約制を積極的に導入し、大いに研究の活性化をはかるべきであります。大学は単なる研究機関でもなければ、単なる教育機関でもありません。大学は学問を通して人間形成を实践する場であります。新制大学はその理念の通りに、教養教育と専門教育を並立重畳させ、教養学部を中心とする総合大学を創造すべきであります。私の年来の念願であり信念であることの一端を述べて、私の退官の辞といたします。

新 任 教 官 紹 介

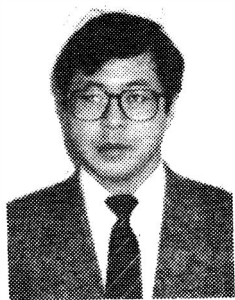
。床子 仁^{しょうじ ひとし}
昭51. 3 助教授（理学部） 62. 11. 1
北海道大学大学院工学研究科博士課程
単位取得退学
（工学博士）
担当：雪氷学

。大石 雅寿^{おおいし まさとし}
昭60. 3 助手（理学部） 62. 11. 1
東京大学大学院理学系研究科博士課程
修了
（理学博士）
担当：電波物理学

。小原 治樹
昭49. 3 講師（工学部） 63. 1. 1（採用年月日）
東北大学大学院工学研究科博士課程
単位取得退学
（工学博士）
担当：制御機器

◇◆◇ 新 任 の 御 挨 拶 ◇◆◇

理学部助教授 床 子 仁



昨年11月1日に、地球科学科雪氷学講座に赴任して参りました。皆様の中には、もう色々と面倒を見て頂いている方が大勢いらしゃいますが、どうぞ宜しくお願い致します。

私は、昭和23年に札幌で生まれ、そのまま大学・大学院までずっと札幌で暮らしておりました。冬の札幌は、富山に較べるとやはり随分寒く、小さい頃頬を紅くして外から帰ると、当時流行っていた薪ストーブや貯炭式のルンペンストーブに当たり、凍った身体が徐々に融けてゆくような心地好さを何度も味わいました。そこに炊きたてのご飯と身の厚い焼いたホッケや、塩からくした熱々の三平汁などがあると、これはもういまでもたまらない思いが致します。

大学院に進んだ時には、氷、それも南極の氷を調べるのがテーマになっておりました。研究が一段

落した昭和53年秋、コア氷の解析では世界的草分けの一つであるニューヨーク州立大学の氷コア研究所に就職が決まり、生後7ヶ月の娘を連れて一家で、バッファロー市に向け渡米致しました。当初は、ありとあらゆる種類の失敗のくり返しで、いま思い出しても赤面するばかりです。あちらにも四季は有り、四季の祭が有り、祭を楽しむ人の心にも触れました。親しい人達と家庭で楽しむパーティーは実に愉快で、私の話を聞いてやろうという優しさと誠意に満ちた笑顔が、いつも encourage してくれたことは、感謝するばかりです。外側の軽く焦げ目のついた肉塊に長いナイフを入れると、思わず唾で喉が鳴る juicy なターキーやハム。これを、客の家族も一緒にわいわい言いながら食べる楽しさは、たまりません。渡米時には3人だった家族も、帰国する時には4人。満9年住んでいたバッファローとも別れる時、つらい思いが致しました。

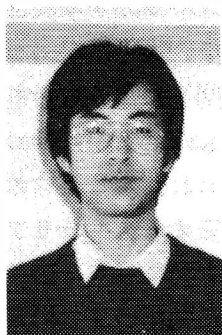
富山は四季の美しいところ。そして四季の祭が有

り、祭を楽しむ人の心が息づいています。こちらに赴任してから、もう3ヶ月。相変わらずあらゆる種類の失敗を続けておりますが、暖かくお世話下さる

皆様にはお礼の言葉の申しようもありません。ただ、少しでも皆様のお役に立てるよう微力を尽くしたいと思っております。

◆◆◆ 新 任 の 御 挨 拶 ◆◆◆

理学部助手 大 石 雅 寿



昭和62年11月1日付けで物理学教室電波物理学講座に赴任して参りました。私は、これまで東京大学東京天文台の野辺山宇宙電波観測所に所属していた電波天文学者です。観測をする天文学者がなぜ富山に？とお思いの方もおられるかもしれません。

私がこれまで行ってきた仕事は、星と星の間にある星間分子組成を調べ、分子雲の進化を理解するためのものでした。そのため、多くの分子の電波スペクトルを45mも直径がある大型電波望遠鏡で受信し、その解析を行ってきました。

解析を行っていて強く思ったことは、受信した電波スペクトルの同定をするためには、実験室での測定データが不足している、ということでした。そのため、私は、この数年ほど分子分光を行っている

ろいろな研究室を訪れては、共同で測定などをしてきました。富山大学にも、数回、お邪魔させていただいたこともあり、それが縁で、今回、富山大学の仲間に加えさせていただきました。

赴任してほぼ3ヶ月たち、ようやく新しい環境にも慣れてきました。どの程度降るか、楽しみにしていた雪も、今冬は暖冬でたいしたこともなく、また、気温も、最低で氷点下数度程度で、これまでいた野辺山に較べると、20度ほども暖かく、久しぶりに楽な冬を過ごしています（しかし、そう思っていてドカ雪が降ると、ウロタエルかもしれない）。

私は、分子分光の実験面では、ほぼ素人に近く、また、天体観測などのため、時々、留守にするなど、皆様に多大な御迷惑をおかけすると思いますが、なんとか、天文学と分光学のパイプ役となり、両分野の発展に少しでも貢献したいと考えておりますので、よろしく御指導のほどお願い致します。

◆◆◆ 新 任 の ご あ い さ つ ◆◆◆

工学部講師 小 原 治 樹



1月1日付けで生産機械工学科の一員に加えさせていただきました。私は仙台で三年ほど助手を勤め、その後八王子近辺で10年ほど会社で研究開発を行っておりました。専門は放電成形、放電加工といった放電を応用した工作機械です。この分野の研究は戦後急速に発達してきましたが、電気、熱、流体、物性といった様々な因子が複雑にからみ合い、未だ不明の点が多い加工法です。最近ではレーザー加工等が隆盛ですが、まだまだこれに置きかわる事は

できません。富山地区ではこの分野の研究は多くないようですが、日本のマスマシニング技術を支える金型加工に直結する分野ですので、富山地区の様々な方々と接触して、金型、メカトロニクス関係も含め、勉強してゆきたいと思っています。しばらく大学から離れていましたので、とりあえずは錆びついた頭の切換えから始めます。

富山は全く初めてです。雪が深いと大分脅かされましたので、10年前の長靴を引張り出したり、スコップを買ったりしましたが、暖冬の影響で八王子よりむしろ暖かでほっとしています。海、山が近く、食べ物おいしいので精神衛生上、仲々良いところで

す。スキー場が近いようですが、もう十数年スキーとは縁がありません。足を折って学生に笑われそうですから当分は大人しくして居るつもりです。

何も無い一から始めなければなりませんので、皆様に御迷惑をおかけすることと思いますが、よろしくお願いします。

*** オーストラリア開拓の忘れ形見達 ***

教育学部助教授 高橋 春 成

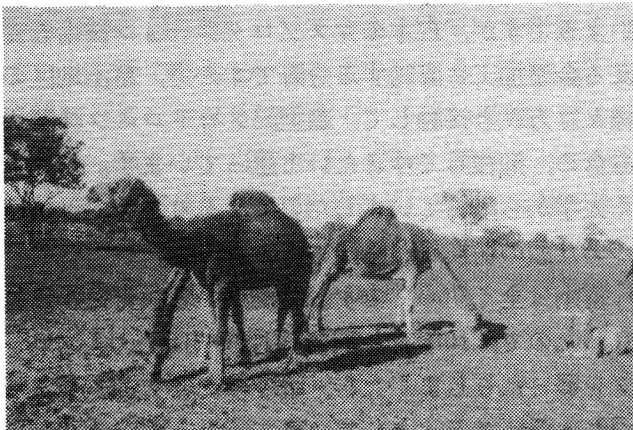
昨年の秋口、機会があってオーストラリアを訪れた。ニューサウスウェールズ州にあるニューカッスル大学に Visiting Fellow（受入者、C.A.Tisdell 教授）として2ヶ月間滞在する間、各地で行ったフィールド調査でオーストラリア開拓の忘れ形見ともいべき動物達にしばしば出くわした。

ご承知のようにオーストラリアへは1788年以来イギリスをはじめとした国々から多くの人々が入植してきた。彼らがやってくる前は先住民であるアボリジニがわずかにイヌを家畜として狩猟採取の生活をしていていたが、今年は建国200年にあたるということで盛大なセレモニーが各地で催されている。

さて、ヨーロッパ系の人々を中心にオーストラリアの開拓が進む18世紀末から20世紀前半にかけての頃、彼らのよき伴侶となり彼らの生活をおおいに支えてきたものといえば、ヤギ (*Capris hircus*)、ブタ (*Sus scrofa*)、ラクダ (*Camelus dromedarius*)、ロバ (*Equus asinus*)、ウシ (*Bos taurus*, *Bos indicus*)、スイギュウ (*Bubalus bubalus*)、ウマ (*Equus caballus*) といった家畜達であった。これらの家畜達は入植・開拓者に食肉やミルクなどを提供し、また様々な荷物の運搬屋であった。ヤギ、ロバ、ブタなどはアウトバックの開拓にはかかせな

い家畜であったし、ラクダはオーストラリア中央部の砂漠、半砂漠地になくはない駄獣であった。また、スイギュウは北部湿潤地の開拓に重要な役割をはたしてきた。ゴールドラッシュ時にもヤギやロバをはじめ多くの家畜が人々に伴われた。これらの家畜達はすべて1788年以降外部からオーストラリアに搬入されてきたものである。

ここでとりあげるオーストラリア開拓の忘れ形見ともいべき動物とは、このような開拓時に重要な役割をはたした家畜達の再野生化した群れのことである。つまり、かつては家畜として飼育されていたが、今では人の手から離れ独自の力で野生として生活している家畜達のことを指す。これらの再野生化家畜に最初に出会ったのは、ニューサウスウェールズ州北西部の国立公園の近くであった。国立公園と牧場との境界部に設けられたワナに何やらイノシシのようなものが一頭かかっていた。聞けば、これはブタの再野生化したものだという。その形状は我々がイメージするヨークシャーやパークシャーといったブタとはかなりかけはなれており、顔つき、体つき、毛並みなどはブタの原種であるイノシシにむしろ近かった。野での生活が先祖がえりをもたらしめているのであろうか。これらの再野生化ブタは、特に開拓時において飼育の粗放性、柵や小屋の破損、不慮の事故などから野にさまよい出たものの子孫であるといわれる。オーストラリアには現在300~600万頭もの再野生化ブタが生息するといわれている。この数字はオーストラリアの人口の約1/3に匹敵する。上述したようにワナにかけられているのは、これらが麦類、イモ類、イネ、牧草などの農作物に被害をあたえるからである。再野生化ブタによる被害は農作物にとどまらず、オーストラリアの基幹産業の一つである牧畜業にも及んでいる。ウシやヒツジなどの放牧地帯で食物や水をめぐってそれらと競合する



野生化したラクダ（捕獲されたもの）1987年9月

上、小ヒツジを捕食するという。ブタがヒツジを食うとは信じがたい話であるが、ヒツジの粗放的放牧地帯では再野生化ブタによる小ヒツジの捕食問題があちこちで生じている。さらに、再野生化ブタは国立公園をはじめ各地で在来動植物の攪乱因子となっている。しかし、このように概して害獣としての傾向が強い一方で、大物猟に乏しいオーストラリアの狩猟界では格好の狩猟獣となり、多くのハンターに大物猟の醍醐味を提供している。また、近年では再野生化ブタの肉が大量に海外に輸出され、1984年のオーストラリアからのそれらの輸出額は1000万Aus t. \$にも及んでいる。我々にほとんど知られていないがその一部は我国にも輸出されているのである。

オーストラリア中央部の砂漠、半砂漠地に位置する町アリススプリングス近郊にはいくつかのラクダ牧場があり（写真参照）、観光客はそこでラクダに乗せてもらうことができる。しかしながら、これらのラクダ達が再野生化したラクダを捕獲し調教したものであるということを知っている観光客はほとんどいない。オーストラリアの砂漠、半砂漠地には今なお2万頭ぐらいのラクダが残存しているといわれる。ラクダは内陸部の乾燥地の開拓においてなくてはならない存在であったが、その後の利用価値の低下により遺棄された結果再野生化し、それらの子孫達が今なお乾燥地をさまよっているのである。

アリススプリングスとともにノーザンテリトリーに含まれるダーウィンを訪れた時には、再野生化したスイギュウに出会った。ダーウィン近郊の気候はサバンナで、雨季はかなり湿潤となる。この地域の沿岸部や河川にはワニもいるが、アデレード川の支流部を小型のボートで巡検している時、水辺の食物を食べに出てきたスイギュウに何度か出くわした。当地にあるカカドゥ国立公園では、近年再野生化スイギュウの撲滅運動が展開されたという。なぜかとなぜねると、それらによる被害、特に在来の植物への影響と土壌侵食が深刻だからとの答えがかえってきた。しかしながら、ダーウィン近郊のレストランでは、スイギュウのステーキが目玉商品となっているし、当地の観光サファリの呼び物はこの再野生化スイギュウとワニと相場が決まっている。ここでも再野生化家畜のもつ二面性の問題が生じていた。

オーストラリアの動物といえば、我々日本人にはコアラ、カンガルー、エリマキトカゲがすぐに目にかんてくる。しかし、オーストラリア開拓の忘れ形見ともいべきこれら再野生化家畜達の存在にも留意したいものである。これらにはオーストラリア開拓の歴史がきざみこまれているのであり、今後オーストラリアへ行かれるむきには是非このような動物達にも関心を寄せていただきたい。

——— 女子留学生の日記から ———

外国人留学生（人文学部） 李 寧（中国）

○月○日 晴

今日、私はついに富山にやってきた。夢に見た留学の生活はいよいよここから始まるのだ。鼓動の高まりを抑えきれない。

日本は私にとって、近い国でもあり、遠い国でもある。ここに美しい自然があり、勤勉向学で、親切的な国民がいる。同時に、私のまったく知らないものの多い世界でもある。「住めば都」、「郷に入れば郷に従え」といういい方があるが、三十年ほど大陸の生活をしてきた私はすぐにはこの国の生活に慣れるのかしら、いささか不安な思いがする。でも、人間というものはよく自分の知らないものにこそ興味

学園ニュースに留学の感想を書くのは、富大の習わしのように、今度は私にもその番がまわってきた。しかし、一体何を書いたらよいのか、頭をひねる。感受性のするどく、文才のある方はすらすらと書けるだろうが、才能のない私はいくら考えてもいい考えが出てこない。仕方なく、私の留学日記から二、三篇を抄録して、与えられた任務を果させていたたく。

日記は本来心や魂の記録であって、人に見せるものではない。しかし、私の日記は生活メモにすぎず、ここで公表してもかまわない。ただ失礼なところがないかが心配で、その点はお赦しいただきたい。

が湧くのである。日本は中国とまったく社会組織の違う国である。それだけに一層自分の好奇心を募らせる。一日も早くこの社会にとけ込もう。新しい生活のスタートラインは白でも黒でも、とにかく、馬力をかけて、一生けんめい頑張るつもりである。

○月○日 雪

朝、カーテンをあけると昨夜来の雪がまだ降りつづいている。日本の冬は私にとって、初めてで、めずらしい。さっそく戸外に出て、雪風景の写真を撮った。一番趣きのあるのは、白雪一面の中につばきの赤色の花びらがちょこんと顔を覗かせる光景である。これを目の前にして、私は思わず、故郷北京の風景を思い出した。私の家は、清の皇帝の離宮であった頤和園のすぐそばにある。中央に築かれた万寿山とその周囲の美しい建物群、さらに趣きに富む有名な昆明湖、ことに、その湖は夏には水泳場、冬にはスケート場として大学生たちに親しまれている。

富山の風景も美しい。北アルプスと呼ばれる立山、その頂の雪は夏になっても融けないそうだ。まるできびしい剛毅な男のようである。だが、私は山より川の方が好きである、川こそ女性的である。都市の真中を流れる神通川、清冽な水、水面に戯れる鳥々、日曜日となると、釣りをする人々が川のほとりを賑わせている。戦後四十年、日本はすっかり変わったというが、それはこうした豊かな自然の中からも知ることができる。

○月○日 曇り

近頃、休講が多い、毎日図書館へ通う。アパートはタタミで、坐ることに慣れていないから。しかし、図書館の閲覧室は、夜八時になると閉まる。あとで聞くと、職員の交替問題の他に、暖房の問題があるそうだ。中国の大学の図書館の閲覧室は夜十一時になっても、相かわらず、燈がひかっている。なるほど、経済大国の日本は、こんな細かいところまで、エネルギーを節約している。まことに感服の至りだ。

○月○日 曇り

小雪が降っている。地面がベチャベチャになった。図書館で、平安朝日記文学を読んでいる。これが私の来日後の研究課目である。日本の古典は非常に難しいが、日本人の民族性を知り、日本女性の心を探るには古典文学から研究する方が早道と思う。それに、平安文学研究の大家、山口博先生がそばにいる。

だがそれにしても、北陸の冬の気候ははじめじめし、心を暗くする。女流日記文学の作者達の気持ちをなんとなく理解できたような気がする。日本は島国で、季節感が強い。人間の感情とは、季節の変化につれて、よくうつり変わるものである。平安時代の女性たちのなよやかで、センチメンタルな性質もこの風土の中で生まれた。中国の武則天のような強い女性でも、もし日本列島に生まれたら、しなやかになったかも知れない。とすると、繊細で、内向的、そして思慮分別のある紫式部は大陸に生まれかわったら、どうなったのであろうか。

○月○日 雪

寒い日がつづいている。外は北京のような肌を刺すほどではないが。夕べ、山口先生の奥さんから和式の綿入れを戴いた。まさに、雪中に炭といった思いである。さっそく着替えた。暖かさがたちまち体をつつんだ。それは綿入れのおかげというより、奥さんの心の暖かさによる。日本にきてから、多くの方がたの親切に出会った。北陸の冬は厳しいが、当地の人びとの心は皆、小春日和のように暖かい。

最近、友達が段々増えてきた。中には、中国語を勉強する人もいる。私はくる前に北京の大学（北京国際関係学院）で日本語基礎教育を担当していた。中国の学生は外国語を勉強する場合、すすんで会話に力を入れる。私の大学の日本語科では、特に三年生になると、講義は全部日本語でやる。日本にきて、感じたことは、中国文学・語学を専攻する学生の多くが、あまり中国語を話さないことである。実際はどうなのであろうか。富山県内各地で、国際化が唱えられ、また、主婦も、若い人も中国語の勉強意欲が高いと聞く。学内の若い人も中国語でどんどん話したいものだ。

○月○日 晴

午後、開架閲覧室でたまたま、中国の近代文学者郭沫若が一九二三年日本滞在中に書いた詩をみつけた。詩の意味は深い。さっそく、ノートに写した。

諸君の国の風景はうるわしい、
諸君の国の女性は心やさしい、
諸君の国の物質はすばらしい、
諸君の国の日常生活は平穏なようだ。
だが……………

実は、原文の最後の一句は「…」ではない。で

も、その表現はちょっと時代遅れで、書き直される必要がある。しかし、現在、それをどのように書き入れるのが適切か俄かには決め難い。これからの課題にとっておこう。

明日はまた雪が降るかも知れない。雪の道を歩くのがすきになった。

富山はますます私に近づいてきている。

◇◇◇◇ 昭和62年度公開講座を終えて ◇◇◇◇

前公開講座委員長 吉田 順 作

昭和62年度富山大学公開講座は、全学的なものとして (1)現代を考える (2)高齢化社会を考える (3)健康・スポーツ教室の3つが企画・実施され、まずまずの成果を収めたように思う。以下簡単にこの経緯を振り返ってみよう。

(1)現代を考える

私がオーガナイザーを勤めて企画・実施したもので

期間 9月25日～10月17日(11日間)

会場 工学部106大講義堂

カリキュラム

- 1 9/25(金) 18～20 小黒千足(理学部)
『生命と現代社会』
- 2 9/26(土) 13:30～15:30
中川眸(教育学部)
『食文化の変遷 ―鮎を中心として―』
- 3 9/26(土) 15:40～17:40
柳田友道(富山大学名誉教授)
『伝染病との戦いの後を顧みて』
- 4 9/28(月) 18～20 矢澤英一(人文学部)
『ロシア文学と現代』
- 5 9/30(水) 18～20 古田俊吉(経済学部)
『公共部門の成長 ―その要因と限界―』
- 6 10/2(金) 18～20
中村剛(保健管理センター)
『“学生の訴え”から』
- 7 10/5(月) 18～20 森克徳(教養部)
『超伝導物性研究の動向』
- 8 10/7(火) 18～20 松本賢一(理学部)
『素粒子と宇宙』
- 9 10/9(金) 18～20 武井勲(経済学部)
『リスクの保障と予防(リスクマネジメントの思潮)』

- 10 10/20(月) 18～20 杉本益規(工学部)
『“粉”を科学する』
- 11 10/14(水) 18～20 富川盛道(人文学部)
『アフリカから現代を考える』
- 12 10/17(土) 14～16 龍山智榮(工学部)
『半導体物性研究の新しい動向』

受講者 26名(19名)

()内は $\frac{2}{3}$ 以上の出席で修了証書を差し上げた人数であるが、この講座の受講者の出席率が良好であることが分る。

私がオーガナイザーをつとめた公開講座は、これが5回目のものであるが、受講者も常連の方が多く、どの講師の講演でも質疑討論が活発であった。年令層は30代以上の方が多かった。

(2)高齢化社会を考える

経済学部の坂口正志先生がオーガナイザーで企画・実施していただいた。

期間 10月19日～11月9日(10日間)

会場 経済学部101番教室

カリキュラム

- 1 10/19(月) 18～20 竹川慎吾(経済学部)
『高齢化社会の現状と課題・定年制と雇用問題』
- 2 10/21(水) 18～20 丹羽昇(経済学部)
『今後の経済動向と老後の生活』
- 3 10/23(金) 18～20 浅井亨(人文学部)
『老年医学と生活』
- 4 10/26(月) 18～20 神川康子(教育学部)
『老人と家族関係』
- 5 10/28(水) 18～20 勝野良一(教養部)
『フランス文学に見られる老人の生き方』
- 6 10/30(金) 18～20 山崎清(経済学部)
『年金制度と老齢生活』

7 11/2(月) 18~20

河野信弘(保健管理センター所長)

『健康生活と運動』

8 11/4(水) 18~20 松嶋道夫(経済学部)

『高齢者と家族の法律問題』

9 11/6(金) 18~20 山崎清(経済学部)

『高齢化社会と年金制度』

10 11/9(月) 18~20 中藤康俊(経済学部)

『今後における高齢化社会の課題と展望』

受講者22名(13名)

受講者は40代~60代が多く、年金・保健制度や健康な老後生活について活発な質疑応答があった。

(3)健康・スポーツ教室

教育学部の山地啓司先生がオーガナイザーで次の3コースを企画・実施していただいた。

(a)ジョギングコース

講師 山地啓司(教育学部)

期間 8月21日~9月7日(9日間)

会場 空港スポーツ緑地陸上競技場

受講者 12名(9名)

(b) バドミントンコース

講師 福田明夫(教養部) 西川友知之(教育学部)

期間 9月24日~10月2日(7日間)

会場 第3体育館

受講者 6名(6名)

(c) 硬式テニスコース

講師 山下三郎(教育学部) 北村潔和(教養部)

期間 12月24日~12月27日(4日間)

会場 第1体育館

受講者 16名(15名)

全学的な公開講座は以上の3件であるが、教育学部が下記の公開講座を実施した。

講座名 マイクロコンピュータの教育利用
ーレゴ・ロゴ実験教室ー

講師 山西潤一(教育学部)

期間 7月29日~7月31日(3日間)

会場 教育学部附属教育実践研究指導センター

対象者 小・中学校の教諭

受講者 20名(20名)

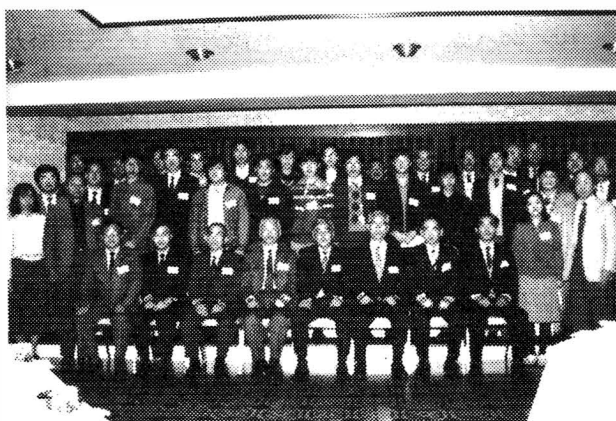
全講座を総括すれば、受講者が102名で修了証書授与者が82名であり、まずは盛会裡に昭和62年度公開講座を終える事が出来たと喜んでいる。

・×・×・学 生 部 だ よ り・×・×・

昭和62年度外国人留学生懇談会及び 工場見学会の実施について

1 外国人留学生懇談会

11月20日(金) 富山県職員会館において、本学に在学する外国人留学生・外国人研究員と大学関係者とが親睦を深め、併せて留学生間の交流を図ること



を目的として学長主催による懇談会が開催されました。

この会には外国人留学生13名、外国人研究員2名、学部派遣留学生(帰国者)1名に、大学側から、学



長、学生部長、各学部長、国際交流委員会留学生部会委員、指導教官及び事務局長ほか本部役職員が出席し盛大に行われました。

大井学長から健康に留意し初期の目的を達成されるよう激励の言葉があり、学生課長によって出席者が紹介され懇談に移りました。

中国、韓国、マレーシア、ボリビアの4か国が一堂に会し国際色豊かな中、終始和やかな雰囲気のもとにそれぞれ日本における生活体験を主に活発な意見交換があり、予定の2時間が短かく感じられる程でした。

○ 学生証の査証について

1・2・3年次生は、各学部の学務係（教養部においては学生係）で、昭和63年度の査証を行います

○ 在来生合宿研修について

在来生合宿研修は、スキーを取り入れ1月7日から13日間までの1週間にわたり、105名の学生が参加し、11名の指導講師のもとに志賀高原ブナ平スキー場を中心に行われた。

富山を出発した時は全く雪がなく、ブナ平でも積雪が少なく心配しましたが、参加者の心掛けがよかつ

○ 在来生合宿研修を終えて

長い伝統を誇る在来生合宿研修は、今回も無事終了することができました。1月7日から13日の6泊7日の日程で、志賀高原ブナ平清広荘を宿泊所としました。しかし、参加学生総数105名と例年よりも若干少なく、暖冬の為、雪不足の状態で例年通りのスキー講習が実施できるか等、不安材料がありました



最後に学部長から閉会の挨拶があり名残を惜しみながら散会しました。

2 工場見学会

外国人留学生の学修の一環として、留学中に日本の企業の先端技術、経営管理等を見聞し、日本に対する理解を深めることを目的とする工場見学会を去る11月20日（金）実施いたしました。

本年度は、富山市の株式会社 不二越を見学し、同社の最新ロボット工場、軸受工場等を見学し日本に関する知識、理解を深めることができ、有意義な見学となりました。

ので必ず受けて下さい。

なお、査証を受けない学生証は無効となります。

たせいかその後降雪にめぐまれ、充実した研修会となり多大の成果をあげ、無事修了することができました。

これもひとえに指導いただいた諸先生方並びに体育会の学生諸君のおかげと深く感謝いたします。

実行委員長 才 記 克 裕

が、各班の人数減による中味の濃い講習と、7日から雪が降り続いたおかげで、例年以上に成果のある研修となりました。

全体を振り返るとスキー講習は、1日平均5時間5日間、AからK班に分けて、各自のレベルに合わせた講習を行いました。上級班は、技術を完全なも



のにして、いろんな斜面で応用練習。中級班は、高度な技術を習得して、斜面への恐怖心無くす。初級班は、基本技術から入り、緩斜面で高度な技術を習得しました。最後は、各班志賀高原の各ゲレンデをめぐり、雄大な志賀の自然を満喫して、滑り納めとしました。研修項目は、スキー講習の他に、講演会、討論会、映写会を行いました。講演会は、文部省登山研究所の青木俊輔先生に、冬山登山にまつわるエピソードや山の魅力について、話してもらいました。討論会は、各班毎に「学生生活とスポーツ」をメインテーマに、いろいろな角度から話し合い、学部やサークルを越えた意見を聞くことができました。映写会は、最新の滑りを参考に、イメージトレーニングを行いました。以上、前々回よりすすめてきた研修内容の充実は今回で一応の成功をおさめることができました。

本研修の恒例行事である松明滑降と演芸会は、学生間に大変人気があります。松明滑降は、上級班が

松明を持って滑り降りてくる幻想的な光景。残りの者が迎え、松明の炎を集めそれを囲んで全員で合唱しました。演芸会は、最後の夜に各班が考えた演芸を発表するものです。驚きと爆笑の連続のうちに終わり、フィナーレを飾りました。二つとも学生生活に残る思い出となりました。

朝6時半の起床に始まり、夜10時の就寝までスケジュールがつまっており、かなりハードな研修でありましたが、学生間及び学生・教職員相互の親睦が深められ、自然に親しみ、スキーというスポーツを通して一層の人間形成が図られたことと思います。

今後は、過密気味なスケジュールを見直して、参加者にもっとゆとりのある研修を実施してもらうように改善すべきでしょう。

最後になりましたが、本研修に際して、絶大な御協力を賜りました学生部並びに指導教官の方々に心から御礼申し上げます。

○ 昭和63年度家庭教師斡旋希望者の登録手続きについて

家庭教師アルバイトについては、希望者が多いにもかかわらず求人数が少ないため昭和62年度後期から登録制とし、登録者だけに斡旋する方法をとっていますので、斡旋を受けようとする学生は、下記により必ず登録手続をして下さい。

なお、昭和62年度中に登録手続をした学生で、更新を希望する場合は、昭和62年度登録証及び印鑑を持参の上、4月中に更新手続をして下さい。

もし、4月中に更新手続をしなかった場合は、新

規登録者と同じ手続が必要となります。

記

- 登録手続開始時期(新規)：昭和63年4月1日から随時
- " (更新)：昭和63年4月1日から4月30日まで
- 登録手続場所 ：学生部厚生課奨学係

—厚生課—

訂正(おわび)

◦ 第58号(昭和62年12月10日)

4ページ新任Urike Endress氏の「新任のごあいさつ」にかなり誤植がありましたので下記のとおり訂正します。



新任のごあいさつ



人文学部外国人教師

Ulrike Endres

Watashiwa "Amerika?" dewa naidesu. Ich bin aus der Bundesrepublik Deutschland, aus Konstanz am Bodensee. Dort habe ich russische und deutsche Sprache und Literatur studiert. Zuletzt habe ich

in einem gemeinsamen Forschungsprojekt des Fachbereichs Literaturwissenschaft über "Intertextualität und Fiktionalität" mitgearbeitet.

Dass ich nun in Japan bin, liegt daran, dass ich gerne auf brauchbare Zufälle eingehe und ausserdem erkunde ich gerne fremde Länder. Reisen ist Lesen in anderer Form. Manchmal empfinde ich das Leben hier als sehr anstrengend. Sowie man das Land betritt, ist man von einer gnadenlosen Kakophonie der Bandaufnahmen, Werbeslogans, Lautsprecherdurchsagen ... umgeben - "im Land der Stille". Diese übermässige Besorgtheit der Automaten um die Menschen ist irritierend. Es wirkt dem Gefühl von "Anzen" sozusagen entgegen. Aber gerade das ist es wohl, was mich jetzt schon das zweite Mal nach Japan gezogen hat (vorher war ich zweieinhalb Jahre als Lektorin an der Kanazawa Daigaku).

In der sowjetischen Literaturtheorie gibt es den Begriff der Desautomatisierung der Wahrnehmung. Durch Verfremdung und Verstörung steigert sich ihre Intensität. Daran wiederum gewöhnt man sich und es ist schwer darauf zu verzichten... soviel zu meiner Motivation, hier zu sein. Natürlich gibt es auch allerhand Genüsse - vom Essen über die heissen Quellen zu den Festen - ,die locken.

Toyama ist mir als Stadt sympatisch. Wenn man mit den Leuten spricht, wird bald das kulturelle Defizitgefühl gegenüber Kanazawa zum Thema und man merkt, an den öffentlichen Anlagen, Museen, der Strassenbahn..., dass sich die Stadt bemüht, dieses Defizit - ob nun tatsächlich vorhanden oder nicht - zu füllen.

Ausserdem scheint mir, dass hier traditionelle Verhaltensformen noch ziemlich ausgeprägt sind und es gibt für mich viel Neues - keineswegs "kenne ich mich aus". Ich werde mir Zeit lassen, alles kennenzulernen.

キャンパス樹木誌(2)

メタセコイア (スギ科)

1945年, 中国四川省の奥地で調査を行っていた森林官が, とある村落で一本の奇妙な針葉樹を見つけた。それは村はずれの小さな廟の傍らに神木として祠られている木だった。イチイに似てイチイにあらず, モミに似てモミにあらず, スギに似てスギにあらず。森林官はその一枝を折りにとって鑑定のため南京大学に送った。受け取った鄭博士はそれを別の植物学者胡博士とともに調べたところ, 驚くべきことにそれは化石植物として1941年, 大阪市大の三木茂博士によってメタセコイアと命名発表されていた植物と同じものであることが判ったのである。

メタセコイアの化石は日本だけでなく世界各地から広く産出する。中生代白亜紀から新生代第三紀にかけて地球上に広く生育しており, 当時の森林の重要な樹種だった。実にその化石植物が中国の奥地に生き残っていたのである。1948年, 胡・鄭両博士はこの植物を *Metasequoia glyptostroboides* と命

名した。日本へは1949年米国から苗が贈られ, 全国で試験栽培され広まった。

メタセコイアはスギ科に属し, 北米東南部の沼沢地に生えるヌマスギ (*Taxodium*) に近い。葉は小



理学部一号館東側にあるメタセコイア

枝を中心に二列平面状に並び、秋になると小枝ごと落下する。温暖湿潤な気候と肥沃な土地を好み、生長は速く高さ40m、胸高直径2mもの大木になる。整った円錐形の樹形が美しく、挿し木で簡単に増やすことから庭園樹として今では全国的に植栽され

ている。

本学キャンパスでは理学部一号館の裏、埋没林標本小屋の横に植えられている。

教養部教授 小 島 覚

学園ニュース編集委員

学 生 部 長	瀧 澤 弘
人 文 学 部	山 口 幸 祐
〃	櫛 木 謙 周
教 育 学 部	佐々木 浩
〃	山 本 都 久
経 済 学 部	大 野 正 道
〃	相 澤 吉 晴

理 学 部	松 本 賢 一
〃	広 岡 公 夫
工 学 部	多 々 静 夫
〃	杉 本 益 規
教 養 部	高 安 和 子
〃	山 本 孝 一